

東アジアにおける佛教研究の動向

菘輪 顕量

概要

ここでは過去50年程度に焦点を当て、1970年代からの東アジア（特に日本）における研究の動向を、いくつかの分野に焦点を当てて纏めてみたい。多くの領域において進展が見られるのであるが、全般的な傾向として、仏教研究が教学思想に対する研究に偏るきらいがあり、修行道の研究が弱い、また社会とのつながりを視野に入れた研究が少ないのではないか。

始めに

ワインシュタイン先生を偲ぶ本日のシンポジウムにお話をさせていただくことを光栄に存じます。私自身、学位論文を執筆し終えた後だったと記憶しておりますが、たまたま日本に来られていたワインスタイン先生にお会いすることがあり、日本仏教の研究、頑張ってくださいと励まされたことを今でも良く覚えております。本日は、東アジアにおかる仏教研究の動向と題し、お話をさせていただきます。少しでもワインスタイン先生のお気持ちに沿うことが出来たらと念願する次第です。

一 シリーズから見る研究

それでは、まず、東アジア世界における仏教に対する研究の展開を叢書シリーズから見ていきたいと思えます。最近までに注目されるものとして次のようなものが挙げられます。

『アジア仏教史』（佼成会） インド編10巻 中国編5巻 日本編9巻全24巻（1973～1976）の刊行 中村元／笠原一男／金岡秀友
『新アジア仏教史』全10巻（2010～2011） 奈良康明・末本文美士・下田正弘・編集協力者の共同

これらは、インド／中国／東南アジア／朝鮮を幅広く網羅し、現代仏教にも目配りしているところが特徴です。

また、一九七〇年代からの日本仏教研究の動向に絞って振り返ってみますと、律宗に対する研究が盛んになったように思います。具体的な所を挙げてみますと、次のようなものが注目されます。

徳田明本『律宗概論』百華苑, 1969 徳田明本『律宗文献目録』百華苑, 1974 細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』（中世史研究叢書）吉川弘文館, 1987 大石雅章『日本中世社会と寺院』清文堂出版, 2004 松尾剛次『鎌倉新仏教の成立—入門儀礼と祖師神話』吉川弘文館, 1988 改訂版 1998 松尾剛次『日本中世の禅と律』吉川弘文館, 2003 『興正菩薩叡尊 700 遠忌 奈良西大寺展 真言律宗の秘宝公開』日本経済新聞社, 1991 西大寺友の会編『真言律宗総本山西大寺』西大寺, 1996 『中世の霞ヶ浦と律宗—よみがえる仏教文化の聖地／土浦市』土浦市立博物館, 1997

この分野での研究の特徴を一言で述べれば、歴史学と仏教学の双方からのアプローチがなされていますが、歴史学の分野からの研究が多いことでしょうか。これは研究者の数に起因すると思います。

さて、この律宗に焦点を当ててみますと、奈良すなわち南都の律宗の研究から京都の律宗の研究へと、時間の経緯とともに移ったように思います。

菘輪顕量『中世初期南都戒律復興の研究』法蔵館, 1998

大塚紀弘『中世禅律仏教論』山川出版, 2009

西谷功『御寺泉涌寺と開山月輪大師』泉涌寺, 2011

西谷功『南宋・鎌倉仏教文化史論』勉誠出版, 2018

大谷由香『中世後期泉涌寺の研究』法蔵館, 2017

などが注目されるところで、明らかに奈良から京都へと関心が移ってきています。なお、律宗は東国の鎌倉にも展開していますので、今後は東国における律宗の研究が望まれるように思います。

二 法会に関する研究

次に注目されるのは、法会に関する研究が飛躍的に進展したことです。芸能史・歴史学や国文学からの研究が始まり、唱導や論議に関する研究として結実しました。そのきっかけは東大寺のお水取りに関連する研究で

あったように思われます。キーパーソンは、佐藤道子、永村眞、稲城信子先生の3名でしょうか。3名の方は、1967（昭和42）年から東京国立文化財研究所芸能部の東大寺二月堂修二会の調査を担当し、6年間、集中的に調査を実施されました。紀要『芸能の科学』に、行事の次第や内容、所作、声明に関する研究を、手書き図も含めた論文として掲載し、その後の調査をまとめて2005年に『東大寺修二会の構成と所作』として発刊しました。また佐藤道子編『中世寺院と法会』（1994, 5, 法蔵館）も、その成果として刊行されました。

このような法会の研究から、法会の構成要素である唱導や論義の研究へと進展しました。

東大寺図書館所蔵の『法勝寺御八講問答記』に対する共同研究の成果である『南都仏教』77、1999がまず注目されます。その後、天台や法相の論義に対する研究が盛んになりました。一例として法相論義を挙げますと、北畠典生編『日本中世の唯識思想』龍谷大学仏教文化研究所、1997、楠淳澄『南都学・北嶺学の世界—法会と仏道』龍谷大学アジア仏教文化研究叢書、2018などは、その様な成果の一つでしょう。

また、南都以外の地における法会の研究としては、天台宗に関わるものが挙げられます。天台論義に関する資料を含めた『続天台宗全書』の刊行は、1987年の『天台大師伝注釈類』から続くもので、『義科廬談 天台宗典編纂所』2017, 1は、その注目すべき資料の一つです。また、海外に活躍する日本人研究者のAsuka, Sango: *The Halo of Golden Light: Imperial Authority and Buddhist Ritual in Heian Japan* (2015) も、注目される研究成果の一つです。

Jacqueline I. Stone 氏の *Original Enlightenment and the Transformation of Medieval Japanese Buddhism* (1999) や *Right Thoughts at the Last Moment—Buddhism and Deathbed Practices in Early Medieval Japan* (2016) などは、日本人の精神性に関わる研究として注目されるものです。

三 宗観念の研究

さて、次に日本に留学した若手の研究者から起きた興味深いテーマである「宗観念」に関する研究も注目されるものです。これは、Eric Schicketanz さんの学位論文『近代中国仏教の歴史認識形成と日中仏教交

流』(2012年,東京大学大学院提出)から引き起こされたもので、同氏『墮落と復興の中国仏教:日本仏教との邂逅とその歴史像の構築』法蔵館,2016,7に結実しました。

彼の主張は、日本的な宗の概念(集団を伴った宗派意識)が明治以降に中国の古代にも適用されるようになったのではないか、日本のような宗観念は中国には存在しない、仏教を「十宗」や「十三宗」という複数の独立した宗派に分ける日本仏教独自の分類様式が、いかに清末・中華民国期の中国思想界に根付いたかを究明するものでした。

これに対して、中国の仏教研究者からも、研究が出されるようになりました。数名の例を挙げれば、中国人民大学の張文良先生や北京大学の王頌先生の論文が挙げられます。王頌先生は華嚴を専門とする研究者ですが、中国華嚴宗における宗観念の成立は、比較的遅く澄観以降ではないかということを書いてあります。では、少し、脇道にそれますが、日本の場合は、どうであったのか、私の専門とも関わりますので、少しく触れたいと思います。仏教の学びの場の変遷という視点からも言及しようかと思えます。

【資料一】天平18(747)年11月10日
雑第二十八秩十卷 上順師所四卷 見六卷
注大乘入楞伽經一秩七卷 請上順師所
(大日本古文書)

【資料二】(『法隆寺資材帳』)天平十九(748)年二月十一日
律衆 十九貫八百四十文 三論衆 三十貫
唯識衆 三十六貫九百六十八文 別三論衆 一百二十貫(中略)

資料一は、古代においては「師所」と呼ばれた、すなわち先生のところの意味でしょうが、そこが修学の間であることを示すものです。経論は貴重なもので、まだ持っている先生のところに行かないと勉強できない時代だったのだと思います。ですから、修学は「師所」で行われたと考えられます。そのような「師所」における修学をしている僧侶たちが、「衆」という名称で呼ばれたと考えられるのが、資料二です。

次に「宗所」なるものが登場します。この宗所の用例は比較的少ないように思いますが、最初が東大寺の創建に伴って設置されたと考えられる「宗所」です。六宗の基本的な文献をそれぞれ収蔵した「六宗の厨子」なるも

のが東大寺の大仏殿に安置されたのです。画期は天平勝宝年間頃(749-757)かと推定されます。

【資料三】「天平勝宝六(754)年十月二十三日 令請求多羅宗所」
(大日本史料二巻 653頁)

この箇所には明らかに「宗所」という言葉が見えます。さて、宗觀念の形成に大きな影響を与えたものは、最澄の天台宗と空海の真言宗であったと思われます。それは両者ともにそれぞれの宗の道場として一つの寺院が設定されるからです。

【資料四】弘仁一四(八二三)年十一月一〇日の官符
「太政官符 真言宗僧五十人
右、被右大臣官称、奉 勅、件宗僧等、自今以後、令住東寺。其宗学者、一依大毘盧遮那金剛頂等二百余卷經、蘇悉地蘇婆呼根本部等一百七十三卷律、金剛頂菩提心釈摩訶衍等十一卷論等、・・・」(『類聚三代格』新訂増補国史大系, 55-56頁)

平安京の南にある東寺が嵯峨天皇によって空海に下賜され、真言の道場とすることが認められたというのは大きな意味を持ったと推定されます。すなわち一寺院に一宗の修学が固定される最初になったと考えられるからです。もちろん実際には真言だけではなかったと思いますが、50名が真言を中心とすれば、寺院に固有の宗と考えられていくのは必然であったのではないのでしょうか。そして、同様のことは最澄の比叡山延暦寺でも起こったと考えられます。

ただ注意しておきたいことは、天台では「宗」という言葉ではなく「家」という言葉が流派を表すものとして用いられていることです。安然によれば、「天台家」「三論家」「法相家」など「～家」という言い方が出てきます。その上で、宗という言葉が用いられています。

【資料五】『教時諍』「大日本国に九宗有り」(大正 75, 355 上)「第一、天竺一仏応化を問わず。第二、震旦諸宗の師資は不同なり。第三、日本の諸の情計は不同なり。第四、三国の諸師の教えは不同なり。」(大

正 75、355 中)

『教時諍論』「禪門相承次第分明」(大正七五、三六三下)、「法華血脈、天台相承分明」(大正 75、363 下)

「唯識宗。初は天竺の弥勒、無著、天親、護法、戒賢に始まる(大正 75、366 中)」「華嚴宗。龍樹より起こる」(大正 75、366 中)「夫れ以みるに一切の諍論は皆、教・時より起こる」(大正 75、369 上)

ここでは「宗」という言葉が、宗旨の意味で用いられていたことがわかります。

また中世の時代になりますと、伝法と相承が「宗」を考える上で重視されていることが確認されます。次の資料を見てみましょう。

【資料六】法然『選択本願念仏集』「伝法」

「問曰、聖道家諸宗、各有師資相承。謂、如天台宗者慧文・南岳・天台・章安・智威・慧威・玄朗・湛然次第相承、如真言宗者大日如來・金剛薩埵・龍樹・龍智・金智・不空次第相承。自餘諸宗又各有相承血脈。而今所旨、言淨土宗有師資相承血脈譜乎。答曰、如聖道家血脈、淨土宗亦有血脈。但於淨土一宗諸家不同。所謂廬山慧遠法師・慈愍三藏・道綽・善導等是也。(大正 83、2 中 - 下)

【資料七】

円爾弁円『十宗要道記』「伝法と相承」を同じく重視

「夫れ生死を出離する際に、涅槃に入る城の門は、甚だ其の数は広多なり。然りと雖も、相承、伝法は、十宗を過ぎず。一には華嚴、二には律宗、三には成実宗、四には俱舍宗、五には三論宗、六には法相宗、七には真言宗、八には天台宗、此の八宗は古に依る。九には淨土宗、十には仏心宗なり。この二つの宗は今に依る。今、此れを撰むるに、三門を出でず。謂わく、一には律門、二には教門、三には禪門なり。」(『禪宗』210 号付録、2 頁)

【資料六】は法然の『選択本願念仏集』、【資料七】は伝円爾の『十宗要道記』です。師資相承、相承、伝法という言葉が使われていますが、伝えられる内容に即した表現が「伝法」、師弟の存在、つまり伝えていく人に焦点を当てた表現が「相承」と考えられますので、宗を意識した時に、人間的な

縦の系列と、教えそのものという二つが特徴とされていたと考えられます。

そして、もう一つ、推定しても良いと思われる点は、修学の場の変化です。最初の資料で紹介しましたように、「師所」から「宗所」に学びの場が展開したことを述べました。そして、宗所の次に出てくるのは「談所」です。この談所の成立の時期は、正確には特定できませんが、天台宗の談所が近江の国、成菩提院に最初にできたと言われます。大体一二世紀頃のこととされます。日蓮宗では一三世紀の後半に静岡の重須が最初の「談所」とされています。そして、この談所では、集団で一つの宗を学ぶことが行われたようです。ということは、「宗」観念が集団を意識するようになった背景には、歴史的には宗所の成立と、天台、真言の専門道場の誕生が大きな影響を与えたのではないかと考えられます。また、平安時代以降、それぞれの宗を中心に学ぶ談所なる修学の場が成立したことも、集団の意識を発展させるのに一役買ったのではないのでしょうか。さらには、平安時代の南都北嶺の僧侶が出仕する法会では、ほぼ必ず南都の僧侶と北嶺の僧侶が対論の上で組み合わせられたことも影響したと考えられます。

四 新たな研究

次に新たな研究として、法相宗関連の研究を見てみたいと思います。注目されるものは、次のような研究です。

青木隆ほか整理『蔵外地論宗文献集成』（2012, ソウル）

吉村誠『中国唯識思想史研究—現状と唯識学派』（大蔵出版, 2013）

金剛大学校編『地論宗の研究』（金剛大学校外国語叢書, 2017）

です。『十地経論』を中心に修学したと考えられる地論宗の研究が進んだと思います。

また、資料紹介を兼ねながら進んだ研究もありました。それが唱導や論義の研究です。資料の紹介では、なんとと言っても真福寺の善本叢刊が注目されるものです。第1期全12巻12冊が注目されます。

第1巻「真福寺古目録集」聖教目録／勝尾流目録／大福田寺目録／大須経蔵目録／経蔵目録稿本／大須真福寺宝生院経蔵聖教目録／大須聖教目録不足分／真福寺開山以来之日録

第2巻「法華経古注釈集」花文集／法華経勸進抄／往因類聚抄

第3巻「説経才学抄」諸聖教説釈／因縁処／説経才学抄

- 第4巻「中世唱導資料集」烏亡問答鈔／諸諷誦／安極玉泉集／肝心集
第5巻「中世仏伝集」釈迦如来八相次第／通俗釈尊伝記／金言類聚抄
／(付録) 釈迦如来八相次第／(付録) 釈迦八相／(付録) 釈尊出世伝
記
第6巻「兩部神道集」天照皇太神儀軌／三角柏伝記／高庫藏等秘抄／
天地靈覚秘書・伊勢大神宮瑞柏鎮守仙宮秘文／二所天照皇太神遷幸時
代抄／兩宮形文深釈／神法樂觀解深法卷下／天照坐二所皇太神正殿觀
／神将東通記・太神宮御託宣記／大日本国開闢本縁神祇秘文／二所皇
大神宮麗氣秘密灌頂印信／続別秘文／梵漢同名釈義／日諱貴本紀／天
下皇大神本縁
第7巻「往生伝集」続本朝往生伝／拾遺往生伝／後拾遺往生伝／三外
往生記／本朝新修往生伝
第8巻「伊勢神道集」伊勢二所皇御大神御鎮座伝記(大田命訓伝)／
往代希有記／大元神一秘書／伊勢二所太神宮神名秘書・大和葛城宝山
記／神皇系図・神皇実録／神祇秘鈔／神道簡要／高宮盗人乱入怪異事
／元応二年高宮御事
第9巻「類聚神祇本源」類聚神祇本源
第10巻「東大寺本末相論史料 古文書集 二」醍醐寺初度事書／醍醐寺
初度具書／東大寺具書／太政官符類／断簡
第11巻「法儀表白集」法則集／覚任表白集／十二巻本表白集(巻第四)
第12巻「性霊集注」性霊集注

一目瞭然と思いますが、目録、唱導、神仏習合関連の資料などが挙げられ
ます。このシリーズは第二期に入り、新たなものが紹介されました。第二
期も十二巻十二冊です。

- 第1巻「真福寺古目録集 二」諸阿闍梨真言密教部類惣録／律宗章疏
／常喜院作集目録／文車第二目録／東南院御前聖教目録／自鈔目録
第2巻「講説論義集」維摩会記／公家最勝講聴聞集 他
第3巻「中世先徳著作集」真言付法纂要抄／無名集／隱語集／覚禪鈔
如法尊勝法／顕密最極口決／秘密源底口決／一二寸合行秘次第
第4巻「中世唱導資料集 二」富楼那集／書集作抄／類聚既驗抄／本朝
諸社記／(付録) 安極玉泉集 断簡・弁曉草 断簡

- 第5巻「聖徳太子伝集」聖徳太子伝暦／仏法最初弘仁伝／松子伝
第6巻「伝記験記集」往生浄土伝／空也誄／地藏菩薩応験記絵詞／日本法花験記／六字経験記
第7巻「中世日本紀集」熱田宮秘釈見聞／熱田講式／神祇秘抄／天照太神御天降記／八幡大菩薩／三種神器并神道秘密／日本紀三輪流
第8巻「古文書集 一」東大寺古文書／東大寺記録／俊乗房重源伊勢大神宮参詣記
第9巻「中世高野山縁起集」高野山秘記／高野口決／高野山深秘／高野山秘事／高野山勸発信心集／高野山記／(付録) 聞持記 他
第10巻「熊野金峯大峯縁起集」熊野権現金剛蔵王宝殿造功日記／熊野三所権現金峯山金剛蔵王縁起／熊野三所権現金峯山金剛蔵王御記文／熊野三所権現金峯金剛蔵王降下御事／熊野三所権現王子眷属金剛蔵王本位／役優婆塞事／(付録) 大峯縁起
第11巻「擲金抄」擲金抄
第12巻「漢文学資料集」本朝文粹／本朝詩合／作文大体 残欠／王沂不渴抄 残欠／文鳳抄 残欠

こちらにも神仏関係の資料が多く含まれています。中世の時代の神仏関係は国文学、歴史学方面から注目され研究が進みましたが、仏教学からはあまり注目される研究がありません。これは、仏教学ではやはり仏教思想に焦点のあたる研究が主流ですので、混交したものに対してはアプローチの方法が難しいのかも知れません。

さて、これらの資料の中で注目されたものが栄西に関するものです。栄西の禪が密禪であるということは昔から言われてきましたが、一三世紀中葉までの禪宗は密教などと融合した形で存在したことが再認識されるようになりました。一方、中国からの渡来僧による禪はそのようなものをあまり含んでいません。

禪の研究では、院政期には『宗鏡録』が既に日本に紹介されていて、貞慶がすでに注目しておりました。13世紀には円爾の『宗鏡録』の講説があり、南都・京都に『宗鏡録』の影響があったことが明らかにされました。中国の禪宗、なかでも永明延寿の再評価がなされたことは、一つの転換点になったように思います。その契機になったのは柳幹康氏の『永明延寿と『宗鏡録』の研究——一心による中国仏教の再編』(法蔵館, 2015)であった

ように思います。

語録の研究でも、大きな進展がありました。その中心に居られたのは、小川隆先生だと思えます。注目される研究を挙げてみます。石井修道編集責任の「中世禅籍叢刊」から始まり、

小川 隆『語録の言葉』（禅文化研究所, 2007）

小川 隆『語録の思想史：中国禅宗文献の研究』（博士学位論文, 2009）

John.R McRae『虚構ゆえの真実：新中国禅宗史』（大蔵出版, 2012）

小川 隆『禅思想史講義』（春秋社, 2015）

『唐代の禅僧』シリーズ（臨川書店, 2007～）

などが刊行されました。

五 修験研究の進展

注目される研究として修験の研究も挙げられると思います。修験は山に対する信仰と仏教思想とが結びついた側面があると考えられますが、この修験に関する研究も飛躍的に進んだように思います。次のようなものが代表的なものとして挙げられるでしょう。

五来重『山の宗教：修験道』（淡交社, 1999）

鈴木昭英『修験道教団の形成と展開—修験道歴史民俗論集 1』（法蔵館, 2003）

関口真規子『修験道教団成立史—当山派を通して』（勉誠出版, 2009）

宮家準『修験道—その伝播と定着』（法蔵館, 2012）

宮家準『修験道の地域的展開』（春秋社, 2012）

時枝務他『近世修験道の諸相』（岩田書院, 岩田書院ブックレット, 2013）

鈴木正崇『山岳信仰—日本文化の根底を探る』（中公新書, 2015）

長谷川賢二『修験道組織の形成と地域社会』（岩田書院, 2016）

近藤祐介『修験道本山派成立史の研究』（校倉書房, 2017）

この分野の研究は歴史学、民俗学をベースにした研究が主流ですので、仏教学からの研究が待たれるところです。実際、そこに目を向けた試みもいくつか見えます。

浅田正博『仏教から見た修験の世界—「修験三十三通記」を読む』(国書刊行会, 2000)

楠淳澄『南都学・北嶺学の世界—法会と仏道』龍谷大学アジア仏教文化研究叢書, 2018

直近の学会から

日本仏教総合研究学会 平成 30 年 9 月例会テーマ 「山と仏教」

日本仏教総合研究学会 平成 30 年度年次大会 (12 月 8 日) の発表・渡辺麻理子「深浦円覚寺 (真言宗醍醐派) 所蔵聖教について—醍醐寺関係書籍・修験道関係書籍を中心に—」

浅田正博先生の研究あたりから、仏教学分野の研究者による研究も少しずつ進んできています。なお、注目されるのは青森県深浦市春光山円覚寺に所蔵される聖教に修験関連文献が多数含まれていることです。深浦の円覚寺の開山は、伝統阿闍梨法印円覚と伝承され、彼は元慶 5 (881) 年に没した僧侶とされています。所蔵資料の中に醍醐寺僧侶文海 (1293-1361?) の資料が含まれていますので、京都の醍醐寺との関連が推定できます。醍醐寺でしたら、当山派修験の本山ですから、大峰との関連が予想されます。また、第 26 世義観 (1855-1921) の時に、すなわち明治 24 (1891) 年、東京帝国大学に『修験道章疏』50 余巻を寄贈したそうです。この時の写本資料が『日本大藏経』の修験道章疏の底本となるのですが、現在、この資料群は、東京大学総合図書館の OPAC では見つかりません。

中世の最末期 (一六世紀) に活躍する阿吸房即伝は、戸隠修験を学び、また九州の英彦山で活躍したことが知られる僧侶です。南北朝の時代に大峰の修験の僧侶たちが、南北朝の動乱の影響を避けて九州の英彦山に移ったことが知られていますので、英彦山には醍醐寺の当山派修験の影響があったことが容易に想像されます。

修験の思想・教理はどのようなものであったのか、歴史学からの推定を紹介します。これは永村眞先生のもので (永村眞「醍醐寺の史料とその伝来」『醍醐寺 三』醍醐寺大観 第三巻、岩波書店、2001) そこでは、「中

世以前の修験を直接に語る醍醐寺史料は極めて少なく、一方江戸前期以降になると『役行者略縁起』・・を始め、・・多彩な史料が散見される。」とされます。仏教学からの研究が待たれる分野であり、特に、その修験の思想家と目される阿吸房即伝の研究が待たれるところです。見通しですが、天台本覚、密教、禪を折衷する総合的な思想が修験の思想であったのではないかと思います。

いずれにしろ、近世に入る前までは修験は、仏教の影響を強く受け、教理的にも興味深い展開をしていたようです。

六 注目される研究会議や新しい研究方法や動向

さて、少し視野を広げますと、東アジア地域で連携しながら研究を進めようという動向が見て取れるように思います。日本・中国・韓国・台湾を含めた研究会議の創設が幾つも為されています。たとえば、「東アジア四大学仏教学会議」（東国大学校 北京大学 台湾大学 東京大学が幹事大学、2012～）がありますし、「東アジア三大学仏教会議」（人民大学 東洋大学 金剛大学が幹事大学）、また大学院生を中心にしたものに、「東アジア印度哲学仏教学大学院生交流フォーラム」（幹事大学 東京大学 人民大学 仏光大学 中央僧伽大学（（東アジア仏教研究会／韓国仏教研究会も支援）、2017～））があります。

また、デジタルデータベースが充実してきたことも、忘れてはなりません。仏教関連では日本の大正新脩大蔵経データベース、SATが重要です。ここは大正蔵図像部も含めて公開し、日本の宗派（浄土宗全書）が作成したデータベースとのリンクもできています。また日本語の現代語訳の公開も、少しずつですが始まっています。それ以外にも、仏教伝道協会の漢訳経論からの英訳を作成するプロジェクトや、Tibet大蔵経の英訳事業がケンツェ財団の仕事として始まっています。これは84000 projectと呼ばれていて、チベット語原典からの翻訳が進められています。

また、漢文典籍のデータベース構築も、驚異的なスピードで進んでいます。すでに、データベース「中国基本古籍庫」や「中国方志庫」が、有料ですが、利用可能になっています。また、最近の中国の大学の多くが導入している「鼎秀」というデータベースも、注目されるものです。この「鼎秀」は、先の二つのものを包み込むような内容の豊富さを持っていますが、

残念ながら日本ではまだ導入事例を聞いていません。浙江大学のキャダル cadal（あらゆる漢籍のデジタル写真化・中国全土のデジタル写真の集成を目指す）も有名なものですが、こちらは、日本で使用できるのは東京大学のみです。

また、台湾仏光山の仏教辞典である『仏光大辞典』の英訳作業（ランカスター氏よりマーク・ブルム氏へ）が始まりつつあります。

デジタルデータ上の記述方式も、テキストデータであれば TEI 方式が標準となりつつあり、また画像であれば IIF（トリプルアイエフ）が標準になりつつあります。

現代社会との関わりという視点でも、興味深い動向が見て取れます。たとえば、修行道に関連するものは、一九七〇年代ころまでの関口真大氏の研究からしばらく空いてしまったように思いますが、一方、社会の方では修行道が直接に関心の対象になりました。そのきっかけは、おそらく一九九〇年代に、上座部スリランカの僧侶で駒澤大学に留学したスマナサーラ比丘であったのではないかと思います。彼によって、上座仏教の心の観察であるサマタ・ヴィパッサナーが日本に紹介され、修行道が注目される契機になりました。ほぼ、同様の時期に、同じく東京大学に留学していたタイランド、タンマガーイ出身のターナブットー比丘も、少しずつでしたが、上座系のタンマガーイ独自の修行道を紹介しました。また、ベトナム人僧侶のティク・ナット・ハーン師によるプラムヴィレッジの瞑想も、マインドフルネスとして、少しずつ紹介されるようになりました。

二〇〇〇年代に入りますと、アメリカ発のマインドフルネスに注目が集まります。これはマサチューセッツ医科大学の医学部教授(心理学)であったジョン・カバット・ジン教授が立役者であり、日本の曹洞宗の禅を学んで見いだしたと言っていますが、仏教の瞑想はストレスの低減に役立つと位置づけ、マインドフルネス・ストレス低減法 (MBSR) として、社会に紹介します。これを日本に紹介された方が、早稲田大学文学部心理学科の春木豊教授でした。春木先生は既に他界されましたが、その後を越川房子先生が継承され、早稲田大学を中心に日本マインドフルネス学会が創設されました。

また、脳科学の世界でも、仏教の瞑想に関心が集まるようになりました。たとえば、2018年に東洋大学で開催された日本印度学仏教学会では特別講演として脳科学の浅野先生が講演をされました。東大医学部の准教授で

あった熊野宏明先生は、後に早稲田大学人間学術院に転出されますが、マインドフルネスに積極的に取り組んで居られる研究者の一人です。また最近では、東大文学部心理学科の今水寛先生が（ATR から東大文学部へ転任）、マインドフルネスに関心を持って研究を進められています。つまり、仏教と現代社会との関わり、仏教の応用の方向への研究が生まれつつあるように思います。今のところ、日本では仏教学以外のところから関心が生じていますが、本来、仏教学がそちらの方向の関心を持っていても良いのではないかと思います。

応用仏教を正規のコースに追加した大学としては韓国の東国大学校があります。また、オーストラリアのシドニー郊外の Wollongong は Unanderra に存在する Nantian Institute でも Applied Buddhism course が設けられています。

最後に

仏教研究はそれぞれの領域で進展しています。基礎的な研究は着実に進んでいます。たとえば、戒律や法会に関する研究は大いに進みました。しかしながら、それは思想研究を中心としたものであったともいえます。残念なことに、その思想が現代の社会とどのように関わるのか、という応用的な研究は少ないと言わざるを得ません。また、IT の進歩に関連して、新しい基準も出来つつあります。

さらには社会の中で先に定着し始めたマインドフルネスに関して、一部の研究者が言及するのみで、さほど研究は多くはないのが実情です。この分野は、私たちの心がテーマになりますので、社会との関係は密接になることが予想されます。つまりは、現代社会との関連を視野に入れた仏教学の研究があっても良いのではないかと思う次第です。

なお、この部分は、仏教の修行道の研究と密接に関連すると思いますが、実際には修行道に関する研究は、関口真大先生の頃に、注目されて以降、振るわなくなっているように思います。とはいえ、修行道は、仏教の基本とも思いますので、今後の研究が待たれる分野ではないでしょうか。長時間、ご静聴有り難うございました。